

# 御坂峠を望む千年前のムラ

たきざわ  
～滝沢遺跡現地見学会資料～

平成21年10月3日(土)  
山梨県埋蔵文化財センター

## はじめに

山梨県埋蔵文化財センターでは、吉田・河口湖バイパス建設工事に伴い、富士河口湖町に所在する滝沢遺跡の発掘調査を6月から行ってきました。調査は10月末で終了しますが、これまでに発見された成果について、現地で出土品とともにご案内します。

## 滝沢遺跡周辺の歴史について

滝沢遺跡の立地する富士河口湖町の河口地区は、駿河国(静岡県)を通過する東海道と甲斐国を結ぶ古代の官路「甲斐路」または「御坂路」と呼ばれる道路が通っていたといわれ、平安時代の法典『延喜式』に記載された、中央との連絡に使用する馬を用意するための施設「河口駅」(甲斐国三駅の1つ)があったといわれています。

## 発掘調査について

滝沢遺跡は、周知の遺跡(埋蔵文化財包蔵地)として登録されていましたが、平成17(2005)年度に国道137号河口2期バイパス建設工事に先立ち、本格的な発掘調査が行われました。その結果、弥生時代から平安時代にかけての遺跡であることが確認され、中でも平安時代(9世紀～10世紀頃)の竪穴住居跡が15軒発見されており、この遺跡一帯が官道に沿って広がっていた平安時代の集落であったことが考えられます。

今回の調査は、前回の調査区域Ⅰ区～Ⅲ区の東側に隣接し、吉田河口湖バイパス建設工事(河口2期バイパス建設予定地を一部含む)に先立って、Ⅳ区・Ⅴ区と設定し行いました。

調査区域は、御坂山・三ツ峠山の南麓で、河口湖の北東部の標高840mから850mにかけての緩やかな斜面上に立地しています。遺跡から富士山は見えませんが、黒岳(1,793m)をはじめ御坂山地を一望することができます。

中心となるⅤ区では、東側から中央にかけて地表下1.2m前後の



平安時代のムラのイメージ

層から平安時代(9世紀末～10世紀代)の竪穴住居跡15軒、集石1基、中世以降の掘立柱建物跡1棟、土坑45基、溝状遺構などが発見されています。

住居跡は御坂峠を望むように南北方向に帯状に広がっており、同じ場所に何軒も重なって造られている住居もあります。確認面から床面まで、深い住居で60cmほどもあり、良好な状態で発見されています。カマドの残りも良く、中には真っ赤に焼けた土が厚く堆積していました。



カマドのイメージ

これらの住居跡からは、「甲斐型土器」と呼ばれるこの時代の甲斐国の特徴的な素焼きの赤い土器が数多く出土しています。窯で焼かれた灰色の須恵器や釉薬をかけた陶器もあります。中には、墨で文字が書かれたりクギなどで記号のような線がつけられた土器も確認されています。また、土器の他に小刀や鎌などの鉄製品や、網につける長さ4cmほどの土製の錘もあり、近くの川や河口湖で漁をしていたことがうかがえます。

この他、Ⅴ区東側のさらに山側では弥生時代、縄文時代の土器片や石器も出土していますが、これに対し西側は河川の氾濫による砂礫で覆われ、平安時代の住居跡1軒以外遺構はなく、火山灰層の下から古墳時代の土器が出土しているのみです。

I	II	III	IV	V	VI	VII
7世紀末～8世紀	8世紀中頃	9世紀	9世紀末	10世紀	10世紀末～11世紀	11世紀～12世紀
そこがまるい	そこが平らになる	内面にもよう 角がとがる けずりあと	内面にもよう 少しまるい	もうがな まるまる	外に広がる もようなし	もようなし でらばる あつい

奈良・平安時代の土器のかたちの移り変わり

一方、先行して行われたⅣ区の調査では、一辺7mほどの方形周溝墓とみられる遺構が1基発見されています。方形周溝墓は、周りに溝を掘って四角に区画し、内部に土を盛り遺体を埋葬した弥生時代を代表する墓で、方形周溝墓の甲府盆地への波及ルートを考える上で重要です。しかし、周辺から弥生時代中期頃の土器片がわずかに出土しているのみで、周溝から全く遺物が出土していないこと、集団の墓として群をなして造られるという特徴があるにもかかわらず、隣接する前回の調査区において1基も確認されていないことなど、いくつかの問題があり、郡内地域で初めての、しかも県内最古の方形周溝墓とすべきか、今後検討が必要です。

## おわりに

滝沢遺跡は来年度以降も発掘調査が計画されており、多くの遺構・遺物の出土が予想されます。富士山ではなく、御坂峠を望む斜面上に集落が営まれていたことは、何か意味があるように思えますが、いずれにしてもこの地域一帯が駿河と甲府盆地を結ぶ交通の要衝であったことに違いはありません。